

モンゴル語の無主語文の人称特性*

橋本 邦彦†

キーワード： モンゴル語、人称性、有生性、特定性、非人称構文

1 序論

非人称性(impersonality)は、Malchukov and Sierwierska (2011: 2)によると、次のように説明される。

(1) 非人称性の特性

- a. 伝達・機能的には、行為者は脱焦点化／背景化されている。
- b. 主語はその指示対象を欠如している。

(1a)によれば、行為者は周辺に追いやられるか完全に不在である。(1b)によれば、主語は意味の空疎な形式だけの文法要素として、構文の然るべき位置を占めているだけである。

Malchukov and Sierwierska (2011: 2)はさらに、主語の観点から、非人称構文を4つのタイプに分類する。

(2) 非人称構文のタイプ

- a. 指示的でない項的主語(an argumental subject which is not referential)を持つタイプ。

*本論文を完成させるにあたって、編集委員並びに2名の査読者から貴重な意見をいただいた。心からの感謝を申し上げたい。なお、内容の不備、誤記等の責任は一切筆者に帰せられるものである。

†室蘭工業大学大学院工学研究科

- b. 規範的な主語の特性(canonical subject properties)を示さない主語を持つタイプ。
- c. 動詞の項ではなく、意味的なあるいは指示的な特性を示さない、場所充足要素(a place filler manifesting no semantic or referential properties)である主語を持つタイプ。
- d. 顕在的主語の全くない(no overt subject at all)タイプ。

対応する例を、(2a-c)には英語から、(2d)には日本語から、挙げておく。

- (3) a. They speak English in Nigeria.
 b. There are a lot of things on the table to eat.
 c. It always rains in Yakushima Island.
 d. 5 時になりました。(It is five o'clock.)

(3a)の主語 *they* は動詞 *speak* に指定された項であるが、特定の指示対象を持たない総称的(generic)代名詞である。(3b)は主語の位置を *there* が占めているが、*be* 動詞の数が複数である事実から、実は、右側の補語名詞句 *a lot of things* に一致していることがわかる。(3c)の主語 *it* は動詞 *rains* が指定する項ではなく、その位置を充たすためだけの虚辞的(expletive)要素にすぎない。動詞 *rains* の語彙的意味として「雨が降る」事態が概念化されているため、**The rain always rains in Yakushima Island* のように異なる品詞の同じ語からなる冗長的な文は避けられる¹。ただし、英語では主語の出現が必須なので、デフォルトに指示性のない *it* を配置する方略をとるのである。時刻を記述する際、(3d)に見るように、英語では虚辞の *it* を主語にするが、日本語では無主語文の形式をとる。

では、モンゴル語の非人称構文は(2)の 4 つのタイプのうちどれに属するのだろうか。モンゴル語に非人称構文が存在するとすれば、概ね(2d)の「顕在的な主語のない」タイプであると考えられる。その根拠は、3 つある。

第 1 に、モンゴル語には指示性のない項的主語や規範的な主語の特性

¹ *は、当該の文が文法的でないことを示す。

を示さない主語は、存在しない。何ら指示性のない 3 人称代名詞 *they* や *it* は、英語ではしばしば、(3a)の受動的な意味を有する文や(3c)の天候文に用いられるが、対応するモンゴル語の代名詞 *ted* “they”と *ter* “it”は必ず、使用文脈の中で特定の対象を指示する。

- (4) a. Doldugaar sar-d xaluun baj-dag.^{2,3}

the seventh month-D/L hot be-HBT

“It (i.e. expletive *it*) usually is hot in July.”

<Luvsandorj (2006: 351a)>⁴

- b. Ter doldugaar sar-d xaluun baj-dag.

3SG:N the seventh month-D/L hot be-HBT

“It (i.e. something specific) is usually hot in July.” <AD>

- (5) [Olon mongolčuud]_a Kanada-d amidar-ž baj-na.

Many Mongolian people:N Canada-D/L live-ICC be-PRS

[Ted]_a tend angli xel jari-dag.

3PL:N there English language:∅ speak-HBT

“Many Mongolian people_a live in Canada. They_a usually speak English there.” <AD>

² グロスの省略記号は、次の通りである。ABL:Ablative, ACC:Accusative, ADM: Admonitive, APPL:Appeal, ASR: Assertive, ASS: Associative, CLT:Collective, CMP:Completive, CMT:Comitative, CND:Conditional, CNS:Concessive, CNT:Contitutive, CST:Causative, DEM:Demand, DES:Decisive, D/L:Dative/Locative, EP:Epenthetic, G:Genitive, GER:Generic, HBT:Habitual, ICC:Imperfective Connective, IMPF:Imperfective, INS:Instrumental, IP:Impersonal, N:Nominative, NEG:Negative, NPS:Nonpast, P:Personal, PCC:Perfective Connective, PF:Perfective, PL:Plural, PPST:Perfective Past, PRS:Present, PST:Past, PSV:Passive, Q:Question Marker, QUT:Quotative, REF:Reflexive-Possessive, REQ:Request, RPST:Recent Past, SUCC:Successive, TRM:Terminative, VLNT:Voluntative, 1SG:First Person Singular, 2SG:Second Person Singular, 3SG:Third Person Singular, 3PL:Third Person Plural, 1POS:First Person Possessive Particle, 3POS:Third Person Possessive Particle, ∅:Zero Case, -g-:Hidden”g”, -n-:Hidden “n”, +::Attributive Marker

³ 本稿で扱うデータのオリジナルはすべてキリル文字表記であるが、読者の便宜を考慮して、ラテン文字に翻字した。キリル文字とラテン文字の対応は、次の通りである。

母音字 : a: a, э: e, o: o, ө: ö, y: u, ү: ü, e: je, ё: jo, я: ja, ю: ju, и: i, ы: ^jы-ий: ij

子音字 : б: b, в: v, г: g, д: d, ж: ž, з: z, к: k, л: l, м: m, н: n, п: p, р: r, c: s, т: t, ф: f, x: x, ц: c,

ч: č, ш: š

⁴ < > は引用文献の著者名、もしくは略名を示す。<AD>は Attested Data である。

*“They (i.e. someone generic) speak English there.”

(4a)は7月の気温について述べた文である。英語では虚辞の *it* を主語に立てるところだが、モンゴル語では無主語でなければならない。(4b)のように3人称単数形代名詞 *ter* を主語にすると、特定の指示対象の7月における暑さ/熱さについて語ることになる。

(5)は後続文主語に3人称複数代名詞 *ted* の現れる文である。この代名詞は、同一指標 α の示すように、先行文主語 *olon mongolčuud* と同一指示関係にある。総称的解釈は排除される。

第2の根拠は、モンゴル語の天候文(meteorological sentences)では、英語のように虚辞主語 *it* を用いることも、ウラル諸語のように無主語となることもなく(c.f. Salo (2011))、専ら天候を表す名詞が主語の役割を演じる。

- (6) a. *Boroo or-ž baj-na.*
 rain:N fall-ICC be-PRS
 “It is raining.” <AD>
 b. *Tenger duugar-č baj-na.*
 sky:N make a sound-ICC be-PRS
 “It is thundering.” <AD>

(6a)では *boroo* “rain”が、(6b)では *tenger* “sky”が、それぞれ主語として自動詞構文を作っている。他方、英語では、訳に見るように、動詞自体に主語が包含されているので、統語上の要請から虚辞の *it* が現れるのである。

第3の根拠として、気温、季節、時間等を表示する文は、通常、ゼロ格名詞／形容詞＋*bol-* “to become”の無主語文の形式をとる。

- (7) a. *Odoo övöl bol-ž baj-na.*
 now winter:∅ become-ICC be-PRS
 (もう冬になっています。) <M: 193>
 b. 7-r sar-d xamgijn xaluun bol-dog.
 the seventh month-D/L most hot become-HBT

(7 月は最も暑くなります。) <M: 85>

(7a)は季節を表す文であるが、*övöl* は主語ではなく、状態変化の結果を示す動詞 *bol*-の補語と考えられる。(7b)では、補語の位置に形容詞 *xamgijn xaluun* が占めている。どちらの文にも主語は存在しない。

以上の言語事実を踏まえると、モンゴル語の非人称構文は、無主語文に絡む構文に潜んでいるように思われる。けれども、本稿で詳述することになるのであるが、ことはそれ程単純ではない。無主語文の中にも人称性を示すものと示さないものがあるばかりか、人称性の度合いにも違いが見られる。それを実証するためには、形式と意味の両面から、丁寧な記述と分析を積み上げていく必要がある。

本稿の目的は、次の 3 つである。

- 1) 人称性の観点から、特に言語類型的に非人称構文の形式と同定される傾向にある、無主語文と認定される構文を主な分析対象とし、人称構文と非人称構文の分類・識別を試みる。
- 2) 分類・識別に際して、どのような特性を備える時に、人称構文に、あるいは非人称構文になるのか、形式と意味の両面から考察する。
- 3) 人称性と非人称性は明確な境界線で分かれるものではなく、連続的変異の尺度(Scale of Cline)で表される連続体を構成することを提示する。

第 2 節では人称性を示す無主語文を採り上げる。第 3 節は、人称構文と非人称構文の間にあるような無主語文を考察する。第 4 節では真正の非人称性を示す構文を意味の視点から論じていく。第 5 節は結論で、モンゴル語の無主語文を、人称構文とする、あるいは非人称構文とする要因を、意味素性と形式から 3 つのタイプに分類できることと、これらのタイプが人称性の尺度に連続体として位置づけられることを提示する。

2 人称構文としての無主語文

2.1 文法要素により主語の人称の指定される無主語文

モンゴル語には通常、主語となる主格名詞の人称、数、性に関して動詞との間に一致現象は存在しない⁵。

- (8) Bi / Bid / Ta / Ter / Ted / Dorž / Dulmaa
 1SG:N 1PL:N 2SG:N 3SG:N 3PL:N [male name] [female name]
 margaaš Paris jav-na.
 tomorrow Paris go-PRS
 (私は/私たちは/あなたは/彼(女)は/彼らは/ドルジは/ドルマーは明日パリに行きます。) <AD>

(8)に見るように、主語が 1 人称単数・複数であっても、2 人称であっても、3 人称単数・複数であっても、男性名詞や女性名詞であっても、動詞は yav-na のままである。しかしながら例外的に、動詞に付加する接尾辞が特定の人称を主語に指定する事例がある。その場合には普通、主格名詞主語は顕在化せず、無主語文の形をとる。このタイプには、1 人称の指定を行うものと 2 人称の指定を行うものとが観察される。

⁵ 例外的に主格名詞の数と一致する接尾辞がある。

- i. Ted öčigdör šalgalt-aa ög-cöö-sön.
 3PL:N yesterday exam-REF give-CLT-PF
 (彼らは昨日試験を受けました。)
 ii. a. *Ter öčigdör šalgalt-aa ög-cöö-sön.
 3SG:N yesterday exam-REF give-CLT-PF
 b. Ter öčigdör šalgalt-aa ög--sön.
 3SG:N yesterday exam-REF give-PF
 (彼は昨日試験を受けました。)

動詞語幹とアスペクト接尾辞-san⁴に挟まれた-caa⁴-は、集合体での行為を表すので、主格名詞は 2 人以上の複数でなければならない。従って、i は文法的だが、iia は主格名詞が単数形なので非文法的と判断される。iib のように-caa⁴-を削除すれば文法的となる。ただし、この接尾辞は複数形主格名詞にとって必須というわけではなく、iii のようにそれがなかったちでも申し分の文を作る。

- iii. Ted öčigdör šalgalt-aa ög--sön.
 3SG:N yesterday exam-REF give-PF

最初に、1 人称指定の接尾辞から見てみよう。これには、話し手の意思や意図を表す -ja/-jo/-jü と、話し手自身の願望や決意を示す -sugaj/-sügej がある。前者は話し手だけではなく聞き手をも含み入れることができるが (i.e. inclusive “we”), 後者は聞き手を含み入れることはできない。

(9) a. Za, tand caj bari-ja. [including only Speaker]

well 2SG:D/L tea:∅ offer-VLNT

(さあ、あなたにお茶を差し上げましょう。) <MYA: 33>

b. Ta jaagaad zang¹aa-g-aa mart-a-v? Üüd-ee

2SG:N why tie-EP-REF forget-EP-PST door-REF

nee-g-eed xar-i-ja. [including both Speaker and Addressee]

open-EP-PCC look for-EP-VLNT

(あなたは、なぜ、ご自分のネクタイを忘れたのですか。ドアを開けて一緒に探しましょう。) <AD>

c. Aav eež, ax düü nar-t-aa ač bujan,

father mother elder brother younger brother PL-D/L-REF benefits:∅

amžilt büteel-ee örg-ö-sügej. [including only Speaker]

success:∅ achievement-REF offer-EP-DES

(両親と兄弟たちに自分の利益と成功を捧げよう。) <B: 75>

(9a, b)は-ja の例である。(9a)は話し手が聞き手へのお茶のもてなしを申し出る文であるから、話し手一人の意思と解釈できる。一方、(9b)は先行文を受けて、聞き手を巻き込んだの行為の意図を表明している。(9c)の-sügej は話し手自身の決意を表している。

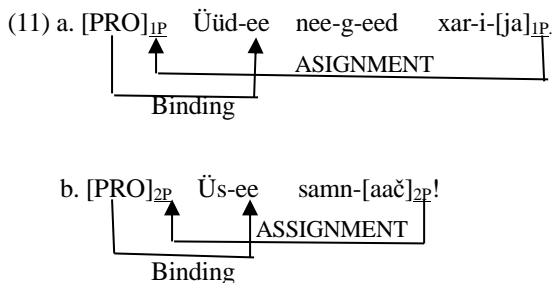
次に、2 人称指定の接尾辞に移ろう。これには、動詞語幹に、要請形 (Request) -aač⁴、要求形 (Demand) -aaraj⁴、懇請形 (Appeal) -gtun/-gtün、訓戒形 (Admonitive) -uuzaj/-üüzej の各接尾辞が付加し、非顕在的な主語に 2 人称の指定を行う⁶。

⁶ 右肩のイタリック体表記の数字は、母音調和による交替形の数を示す: 4 であれば、-a/-e/-o/-ö、3 であれば、-a/-e/-o の母音を含む交替形を持つ。

- (10) a. Üs-ee samn-aač!
 hair-REF comb-REQ
 (ご自分の髪を梳かしてくださいね。) <B: 73>
- b. Bi tanajd narnij šil-ee mart-čix-žee.
 1SG:N 2SG:D/L sunglasses-REF forget-CMP-PPST
 Margaaš av-aad ir-eerej.
 tomorrow take-PCC come-DEM
 (私はあなたへのサングラスをすっかり忘れてしまいました。
 明日、取りに来てくださいな。) <B: 75>
- c. Šalgalt-a-n-d-aa amžilttaj beltg-e-gtün.
 exam-EP-n-D/L-REF successfully prepare-EP-APPL
 (試験が上手くいくように準備してください。) <AD>
- d. Zaxjaa-g-aa av-a-x-aa mart-uuzaj.
 letter-EP-REF take-EP-NPS-REF forget-ADM
 (手紙を受け取るのを忘れないように。) <B: 74>

モンゴル語の再帰所有接尾辞-aa⁴は、同一節内の主語に必ず束縛されねばならないという統語上の制約があるので、(10a, c, d)はどれも、顕在化はしていなくても束縛要素の主語の存在を暗示している。

(9)及び(10)の非顕在的主語を **PRO** と表記すると、動詞語幹の人称付き接尾辞は、その人称を後ろから **PRO** に付与することで、主語の人称を特定していると仮定することができる。この付与の仕方を(9b)と(10a)を代表として図示すると、次のようになる。



(11a)では接尾辞の固有の人称特性である 1 人称が、(11b)では 2 人称が、各々、非顕在型主語に付与された後、この主語が名詞句の再帰所有接尾辞を束縛する。

2.2 文脈から指示対象が検索できる無主語文

このタイプには、文レベルのものと談話レベルのものがある。

(12a, b)は副詞節と主節とから成る複文で、同一文中に非顕在型主語の指示対象を検索する手がかりを見出すことが可能である。

- (12) a. Kofe uu-sn-aas xojš nüd minⁱ serg-e-lee.
 coffee:Ø drink-PF-ABL after eye:N 1POS wake up-EP-RPST
 (コーヒーを飲んだ後で、私の目はすっきりしました。) <B: 176>
- b. Ger-t-ee xari-x ge-tel neg xün
 house-D/L-REF go home-NPS say-TRM one person:N
 nadaas asuu-san.
 1SG:ABL ask-PF
 (自分の家に帰ろうとしていると、一人の人が私に尋ねました。)
 <Vietze 1978: 131>

(12a)では主節主語 nüd “eye”に後接する 1 人称所有小辞 minⁱ が、副詞節主語を 1 人称と特定する手がかりを与えてくれる。身体部位とその所有者の不可分離的關係が一役かっているわけである。(12b)では目的語補語に 1 人称奪格形 nadaas があることから、副詞節主語が 1 人称であると特定できる。副詞節と主節の主語が同一指示の關係にない場合、副詞節内の再帰所有接尾辞は、この 1 人称の非顕在型主語に束縛されるのである。

話し手=1 人称主語の存在を明らかに読み取れる文が散見される。

- (13) a. [PRO]_{IP} Bod-o-n bod-soor čamtaj uulz-san.
 think-EP-ASS think-CNT 2SG:CMT meet-PF
 (ずっと思いつけて君に会えた。) <山越 2012: 271>

b. [PRO]_{IP} Ter tom xüren gult-ijg öms-ö-ž
 that+ big brown boots-ACC put on-ICC
 üz-e-ž bol-o-x uu?
 see-EP-ICC be allowed to-NPS Q
 (そのブーツを履いてもよろしいでしょうか。) <AD>

(13a)には聞き手に当たる čamtaj が、相対する話し手=1 人称の主語を特定する。(13b)は許可を聞き手に求める文であるので、許可の発話者を話し手=1 人称主語と特定できる。

同一節中の直接引用文内の語が、非顕在型主語の指示対象を特定化する例が存在する。

(14) [PRO]_α Xičeel xij-ž baj-tal [[bagš]_β [n]_α] <<[Bujan]_α!
 lesson:∅ do-ICC be-TRM teacher:N 3POS Bujan
 [Činij]_α mod-n-ij navč jaagaad xōx baj-g-aa jum be?>>
 2SG:G tree-n-G leaf:N why blue be-EP-IMPF ASR Q
 ge-v.
 say-PST
 (授業をしていると、先生が、「ボヤン！君の木の葉はなぜ青いの
 ですか。」と言いました。) <L: 149>

(14)の副詞節に主語は見えないが、引用節での先生の呼びかけから判断すると、授業中に絵を描いているのは Bujan である。引用節内の語は節外の語を束縛できないのであるから、トピックの一貫性という談話上の要請から非顕在型主語の指示対象を Bujan であると特定できるのである。

対話において無主語文としばしば出会う。

(15) a. A: Dorž juu xij-ž baj-na ve?
 Dorž:N what:∅ do-ICC be-PRS Q
 (ドルジは何をしていますか。)

B: Xool id-e-ž baj-na.

meal:∅ eat-ICC be-PRS

(食事をしています。) <AD>

b. A: Šuurga namd-a-ž baj-na uu?

storm:N queit-EP-ICC be-PRS Q

(嵐は治まっていますか。)

B: Namd-a-x bajtugaj širüüs-č baj-na.

queit-EP-NPS not only~but also get stronger-ICC be-PRS

(治まっているどころか、いっそう激しくなっています。)

<L: 189>

対話では A の質問を受けての B の応答であるから、旧情報は可能な限り省略される傾向にある。特に、トピックの一貫性の観点から、主語は典型的な旧情報であり容易に復元できるので、顕在化しないことが多い。(15a, b)の主語を復元すると(16a, b)のようになるが、冗長な印象はまぬかれない。

(16) a. B: Dorž/Ter xool id-e-ž baj-na.

Dorž:N/3SG:N meal:∅ eat-EP-ICC be-PRS

(ドルジが/彼が食事をしています。)

b. B: Šuurga namd-a-x bajtugaj širüüs-č

storm:N queit-EP-NPS not only~but also get stronger-ICC

baj-na.

be-PRS

(嵐は治まっているどころか、いっそう激しくなっています。)

複数の文から成る談話でも、非顕在型主語の出現する場合がある。

(17) [Bi]_a odoo jav-ja. [PRO]_a Tasag-t-[aa]_a oč-i-ž

1SG:N now go-VLNT room-D/L-REF go to-EP-ICC

nom-[oo]_a tavi-aad delgüür-ees talx av-na.

book-REF put-PCC shop-ABL bread:∅ buy-PRS

(私は今、出かけましょう。自分の部屋に行って自分の本を置いてから、店でパンを買います。) <AD>

(17)の先行文には 1 人称代名詞主格形の主語がある。ところが、後続文は、一見、無主語文の形になっているが、同一文中で主語に束縛されるべき再帰所有接尾辞のあるがゆえに、非顕在型主語の存在が認められる。この主語はトピックの一貫性に基づいて 1 人称と特定できるわけである。

Givón(1983)や Leisiö(2006)は、談話内でのトピックの一貫性が、ゼロ照応語(zero-anaphor)の出現を認可すると述べている。特に、Leisiö(2006: 217)は、「主語 - トピックの一体化の結果として、広範囲に渡る *pro* 脱落現象が生じる。主語は、完全名詞句により指示される文から遠く隔たったゼロ照応語を制御できるのである。」と説明している。

モンゴル語は、日本語やウラル諸語のンガナサン(Nganasan)語(Leisiö(2006))と同様に、「主語 - トピックの一体化」する言語に属し、トピックに変更のない範囲で、後続する文の主語は「ゼロ照応語」、すなわち、非顕在型の *PRO* を取り得るのである。

2.3 まとめ

2.1 節と 2.2 節で扱った言語事実から、非顕在型主語は、1 人称、2 人称、3 人称という有生(*animate*)と非有生(*inanimate*)双方の指示対象を特定化する非顕在型の代名詞 *PRO* であると考えられる。この *PRO* は、見えないため文を形式的には無主語とするが、機能的には指示代名詞の役割を十全に果たす、【*±animate*; *+specific*】な人称主語と位置づけることができる。人称主語の現れる文は、たとえ無主語文であっても、人称構文なのである。

3 人称構文と非人称構文の間の構文

第 2 節で採り上げた人称的 *PRO* (今後、*PRO_P* と表記)とは異なり、特定の指示対象のない、総称的 *PRO* (今後、*PRO_{GER}* と表記)を多くの言語で認めることができる。*PRO_{GER}* は、【*+animate*; *-specific*】の意味素性を備えた非顕在型主語として捉えられる。

非人称性の特性(1a)で引用したように、行為者が「脱焦点化／背景化」する時に、指示性のない主語の現れる非人称構文となる傾向が見られる。Sansò(2006: 235)は非人称構文の一つに「man-clause のような非人称能動文 (impersonal active clauses)、すなわち、何らかの一般名詞(“man,” “people,” etc.) を主語として持つ構文」を挙げている。たとえば、英語の one や a man などは、有生性は保持するが指示性のない名詞句である。

- (18) a One can learn more about a place, its people and their customs if one speaks the language. <The Super Anchor (2009: 1239A)>
 b. A man cannot live without hope. <ibid. (2009: 1067A)>

(18a, b)は「世間一般の人々」を指すだけで、特定の指示対象を持っていない。

モンゴル語は、英語と違って、非顕在型の PRO_{GER} を脱焦点化／背景化の方略として用いる。PRO_{GER} の出現する文タイプは、次の 2 つと考えられる。

- (19) 総称的な PRO_{GER} を有する無主語文のタイプ
 a. 他動詞型無主語文：直接目的語から始まる他動詞構文
 b. 複文型無主語文：副詞節と主節から構成された複文

3.1 他動詞型無主語文

他動詞構文は通常、主語＋直接目的語＋動詞から成る。

- (20) a. Ter širee xij-sen.
 3SG:N table:Ø make-PF
 (彼はテーブルを作りました。) <M: 382>
 b. Bi ene širee-g mod-oor xij-sen.
 1SG:N this+ table-ACC wood-INS make-PF
 (私はこのテーブルを木で作りました。) <M: 377>

(20a)は、直接目的語が非特定のであるため、ゼロ格形をとっている。他方、(20b)は、指示代名詞に修飾されて特定のになるため、対格形接尾辞が目的語に付加する⁷。ところが、モンゴル語では、常に主語が現れず、直接目的語を軸とする他動詞構文に遭遇することが、度々ある。

- (21) a. Cererl-e-sen noos-oor nexmel-ijn üjldver-t [janz бүр-ijn
clean-EP-PF wool-INS textile-G factory-D/L various-G
daavuu] nex-deg.
clothing:Ø knit-HBT
(精製した羊毛で織る織物工場では、様々な衣類が織られます。)
<L: 188>

- b. A: Mal-aas juu gar-a-x ve?
livestock-ABL what:Ø get-EP-NPS Q
(家畜から何を取りますか。)
B: Mal-aas [noos, nooluur, aris šir gex met] gar-dag.
livestock-ABL wool:Ø cashmere:Ø hides:Ø so on get-HBT
(家畜から羊毛、カシミア、皮などを取ります。)<S&B: 145>

(21a, b)は、非特定のなゼロ格形の直接目的語の無主語文である。(21a)の動詞 nex- “to knit”も、(21b)の動詞 gar- “to get”も共に行為動詞(action verbs)で、習慣形接尾辞-dag⁴が付加している。この接尾辞は、橋本(1995)で記されたように、繰り返し行われる行為や習慣的な行為を表す。どちらの文も、「誰が織るのか」、「誰が取るのか」に関心はない。第 1 次的トピックは、

⁷ 直接目的語は、原則として、[-specific]の時にゼロ格形を、[+specific]の時に対格形をとる。

i. a. Bi ödör бүр nom unš-dag.

1SG:N every day book:Ø read-HBT
(私は毎日本を読みます。)<AD>

b. Bi angi-d-aa ene nom-ijg unš-i-ž baj-na.
1SG:N classroom-D/L-REF this+ book-ACC read-EP-ICC be-PRS

(私は教室でこの本を読んでいます。)<AD>

ia は読書の習慣に言及しており、本であれば何でもよいので、直接目的語はゼロ格形で実現している。一方、ib は指示形容詞 ene により、特定の本を対象とした行為を記述しているので、直接目的語は対格形をとっている。

直接目的語の担う対象にあり、行為者は、たとえば、不特定の工場の従業員であったり、モンゴルの牧民一般であったりと考えられるだろう。

直接目的語が対格形の場合にも、(21a, b)と同様の様相を確認することができる。

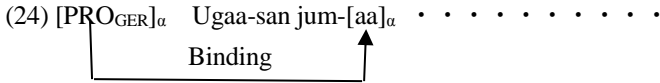
- (22) a. [Šinžlex uxaan-ij sudalgaa-g] tulguur ba xavsarga gež
 science-G research-ACC basic and applied QUT
 angil-dag.
 divide into-HBT
 (科学的な研究は、基礎的なものと応用的なものに分かれる。)
 <M: 299>
- b. [Šuudan-g] ajmg-ijn töv, ter č bajtugaj sum-ijn
 post-ACC province-G center:∅ that:∅ also not only county-G
 töv-d ongc-oor xürg-e-deg.
 center-D/L plane-INS deliver-HBT
 (郵便物は、県の中心ばかりでなく、それをまた郡の中心にも
 飛行機で届けます。) <AD>

(22a, b)の対格形名詞句は、他動詞構文の直接目的語として文頭のトピックの位置を占めている。動詞には習慣形接尾辞-dag^dが付加しており、(22a)では普遍性の高い事実を、(22b)では制度で決められた規則的な行為を表す。どちらの文も行為者は想定できても特定はせず、むしろ事実や行為自体に焦点を置いているのである。

(21a, b)、(22a, b)のような直接目的語を第 1 次的トピックとする事態文 (event sentences) であっても、非顕在型主語の存在を示す例が観察できる。

- (23) [Ugaa-san jum-aa] zun nar-a-n-d xataa-dag.
 wash-PF thing-REF summer sun-EP-n-D/L dry-HBT
 (洗った物は夏に日光で乾かします。) <M: 121>

(23)は直接目的語に再帰所有接尾辞が付いている。この接尾辞は必ず同一文中の主語に束縛されなければならない。(24)に見るように、束縛する主語に総称的 PRO_{GER} を想定することで、再帰所有接尾辞の出現が保証されるわけである。



上記の文はすべて、行為動詞に習慣形接尾辞の付加した無主語文であった。習慣形接尾辞を現在形接尾辞-na^d に置き替えた他動詞型無主語文を見出すことができる。

- (25) a. [Xuvcas] noos-oor xij-ne.
 clothes:Ø wool-INS make-PRS
 (服を羊毛で作ります。) <AD>
- b. [Ögüülber-ijn ex-n-ij üsg-ijg] tom-oor exel-ž
 sentence-G beginning-n-G letter-ACC big-INS begin-ICC
 bič-ne.
 write-PRS
 (文の初めの語は大文字で始めて書きます。) <MX5: 65>

(25a)はゼロ格形の、(25b)は対格形の、直接目的語をとる無主語文である。共に現在形接尾辞の付いた行為動詞である。

現在形接尾辞-na^d は、その名称とは裏腹に、普通、未来の行為や事態を描く文で使用される。

- (26) a. Galt tereg odooxon jav-na.
 train:N very soon leave-PRS
 (列車は間もなく発車します。) <M: 191>
- b. Ažil margaaš-aas exel-ne.
 work:N tomorrow-ABL begin-PRS

(仕事は明日から始まります。) <B: 76>

同時に、時制と関係のない、情景描写や格言のような一般的真理を表す文にも用いられる。

(27) a. Borogčn-ij tal-d bolžmor žirg-e-ne.

grey brown-G steppe-D/L lark:N sing; twitter-EP-PRS

(褐色の草原では、ヒバリがさえずります。) <B: 76>

b. Xen ix jari-na, ter ix ald-a-na.

who:N much talk-PRS 3SG:N much fail-EP-PRS

(たくさんしゃべる者は誰であれ、たくさん失敗する。) <M: 191>

(27a)はダルマギーン・バトバヤル作『褐色のヒバリ』の冒頭の一節である。この情景描写に後続する詳細な描写文には-laa⁴、-v、-žee/-čeeなどの過去時制形が用いられている。(27b)は格言であり、時制と関係なく適用できる一般的真理を述べている。

-na⁴のこうした意味は、習慣形接尾辞-dag⁴の意味と重なり合うので、総称的 PRO_{GER}を認可する資格を有するのである。

他動詞型無主語文であっても、行為動詞に過去時を指定する接尾辞が付いた場合、特定の対象を含意する PRO_pの解釈が生じる。

(28) a. Nadad l xünd-ees xünd [daalgavar] ög-čee.

1SG:D/L only difficult-ABL difficult task:∅ give-PPST

(私にだけひどく難しい仕事をくれました。) <M: 216>

b. [Bidnij jar'aa-g] tasal-čix-laa.

1PL:G conversation-ACC interrupt-CMPL-RPST

(私たちの会話は中断してしまいました。) <M: 133>

(28a)には受領者として1人称与位格形 nadad が完了過去形動詞 ög-čeeと一緒にあって、人称的な非頭在型主語を特定している。(28b)では1人称複数所有代名詞に修飾された直接目的語が近過去形動詞 tasal-čix-laaにより、

「私たちの会話は誰か特定の人に中断された」との含意を得るのである。どちらも行為者には焦点を当てない脱焦点化された文であり、機能的には行為者の含意された受動構文に近い関係にあると思われる。

3.2 複文型無主語文

このタイプで多いのは、条件形接尾辞-bal⁴/-val⁴に導かれた副詞節を持つ複文であろう。

(29) a. Inee-vel zaluuž-i-na.

laugh-CND grow young again-EP-PRS

(笑えば、若返る。) <AD>

b. Xünd ačaa örgö-vel xüčtej bol-no.

heavy load:∅ raise-CND strong become-PRS

(重い荷物を持ち上げると、力持ちになります。) <M: 364>

(29a, b)は人口に膾炙した一般論を述べており、人間であれば誰にでも当てはまる体裁をとっている。副詞節内の動詞は、自動詞(29a)であっても、他動詞(29b)であってもよい。

継続性を示す接尾辞-xlaar⁴も、総称的な読みを提供してくれる。

(30) Ert unt-a-xlaar ert bos-dog.

early sleep-EP-SUCC early wake up-HBT

(早く寝ると、早く目が覚めるものです。) <M: 165>

動詞ではなく、叙述形容詞 xeregtej “necessary”を主節の文末に置く複文がある。

(31) a. Azil exel-bel duusg-a-x xeregtej.

work:∅ begin-CND finish-EP-NPS necessary

(仕事を始めれば、終わらせなければなりません。) <M: 161>

- b. Gadaad xel-ijg sajn sur-a-x-ijn told tüüniijg
 foreign language-ACC well learn-EP-NPS-G in order to 3SG:ACC
 ödör tutam üz-e-x xeregtej.
 every day study-EP-NPS necessary
 (外国語を十分学ぶためには、それを毎日勉強する必要があります。) <M: 313>

(31a)の条件節及び(31b)の目的語節は、それぞれ、*xeregtej* と共起している。いずれの文においても行為者は脱焦点化され、総称的な解釈を与えられる。

3.3 まとめ

3.1 節及び 3.2 節の言語事実から、他動詞型無主語文と複文型無主語文に現れる非頭在型主語は、人称性の含みはあるものの、特定の指示対象を持たない、【+animate; -specific】の総称的な *PRO_{GER}* であることがわかった。*PRO_{GER}* の出現を保証する形式上の要件は、次のようにまとめることができるだろう。

(32) 総称的 *PRO_{GER}* の出現要件

- a. 他動詞型並びに複文型の主節述語を形成する動詞は、行為動詞 (action verbs) でなければならない。
- b. 他動詞型並びに複文型の主節述語を形成する動詞は、時制に関与しない形 (tense-irrelevant forms) をとらなければならない：接尾辞 *-dag⁴*、*-na⁴*、形容詞 *xeregtej* 等。

上記の要件から他動詞型無主語文と複文型無主語文は、Sansò(2006: 235)の言及する「非人称的能動文(impersonal active sentences)」に対応することがわかる⁸。ただし、本節の考察で見てきたように、行為者は非特定の脱焦点化しているとはいえ、「不特定の誰か」もしくは「誰でも」という含意

⁸ 原文では “clauses” を用いているが、本稿の用語の扱いに準じて、“sentences” に変更した。

があるのだから、「弱い人称的能動文(weak personal active sentences)」に分類するのが適切であるように思われる。

4 非人称構文

この構文は、特定の行為者や経験者が、明示的にも暗示的にもまったく存在しないタイプの無主語文と考えられる。

4.1 与位格名詞句型非人称構文

与位格形名詞句が文頭に立つ無主語文を見てみよう。

- (33) a. Ene zuux-a-n-d nüürs tüł-ne.
 this+ stove-EP-n-D/L coal:∅ burn-PRS
 (このストーブでは石炭を燃やします。) <CD: 443>

- b. Ene kino-n-d alⁱ üje-ijn jamar amⁱdral-ijg
 this+ movie-n-D/L which era-G what life-ACC
 uran zoxjool-ijn jamar ard-aar dürsel-sen be?
 literature-G what method-INS portray-PF Q
 (この映画では、どの時代のどのような生活を文学的ななどのような手法で描いたのですか。) <MX5: 71>

(33a)では与位格形の zuux “stove”が、石炭を燃やす場所であると共に、燃やす主体であると解釈できる。ストーブ自体がその内部で石炭を燃やすのである。同様に、(33b)では与位格形の kino “movie”が、ある時代の生活の描かれる場であると同時に、それを描く主体であると捉えることができるのである。

与位格形名詞句は場所と行為の主体という二重性を帯び、あえて特定の誰かが、あるいは何かが、当該の行為をするとか事態を引き起こすという含意を必要としない。

後置詞 tuxaj “about”付きの目的語補語が与位格形名詞句と組むことで、非人称性を表示する例に出会う。

- (34) Ene nom-o-n-d xödöö až axuj-n xögžl-ijn tuxaj
 this+ book-EP-n-D/L agriculture-G development-G about
 bič-čee.
 write-PPST
 (この本には農業の発展について書いてありました。) <AD>

(34)の与位格形の nom “book”は、農業の発展の記述の場であるばかりか、その発展について語る主体でもある。

4.2 語りの非人称構文

文学作品に見られる語り手の視点による叙述も、非人称構文を示す例として挙げられよう。

- (35) [Xangaj nutg-ijn ujaxan xavar exel-ž, dov
 Khangaj territory-G gentle spring:N begin-ICC mound:N
 nogoor-o-n, mod-n-ij zax-a-d šar jarguj
 turn green-EP-ASS forest-n-G path-EP-D/L yellow pasque flower:N
 üz-e-gd-e-ž nüüdljn šuvuu gangar gungar
 see-EP-PSV-EP-ICC migratory bird:N honking
 duugar-a-n] tavgaj ažee.
 make a sound-EP-ASS comfortable there was/were
 (ハンガイ (森林) 地方の穏やかな春が始まり、丘は緑になり、森
 の小道には黄色いアネモネが見かけられ、渡り鳥がガアガア鳴いて、
 心地よかった。) <MX5: 146>

(35)の[]で括った情景を眺めているのは語り手であり、それゆえに、その情景を「心地よい(tavgaj)」と感じ評価するのも語り手自身である。ただ語り手の視点は限りなく情景描写の中に溶け込んで、その人称性を消している。それが読者に、語りの客観描写という印象を与えるのである。

4.3 受動型非人称構文

モンゴル語の受動構文は、接尾辞-gd-を動詞語幹に付加して形成される。構文形式のプロトタイプは、主格形名詞句：被態者／主題(Patient/Theme)＋与位格形名詞句(時に具格形名詞句)：行為者／原因(Agent/Cause)＋動詞語幹-gd-アスペクト／テンス接尾辞である。

- (36) a. Irak Kuvejt-ijn gazar nutg-ijg bulaa-v.
 Iraq:N Kuwait-G territory-ACC occupy-PST
 (イラクはクウェートの領土を占領しました。) <AD>
- b. Kuvejt-ijn gazar nutag Irak-t bulaa-gd-a-v.
 Kuwait-G territory:N Iraq-D/L occupy-PSV-EP-PST
 (クウェートの領土はイラクに占領されました。) <AD>

(36a)は能動の他動詞構文で、主格形主語 *Irak* が行為者として、対格形目的語が被態者として配置されている。対応する(36b)の受動構文では、この被態者が主語に昇格すると同時に、行為者は与位格形補語へと降格する。

Shibatani(1985)、橋本(2003)は、受動構文の機能の一つに行為者の脱焦点化(defocusing of Agent)を掲げている。焦点を付与された被態者が一次的トピックとなって主語の位置を占める一方で、行為者は付加語(adjunct)に変わり、ついには表舞台から完全に姿を消していく。

- (37) a. Neg xaalga xaa-gd-a-vč nögöö xaalga nee-gd-ne.
 one door:N close-PSV-EP-CNC another door:N open-PSV-PRS
 (一つのドアが閉じられても、別のドアが開けられます。) <B: 156>
- b. Ter zaluu šoron-g-oos sull-a-gd-san.
 that+young person:N prison-ABL release-EP-PSV-PF
 (その若者は刑務所から釈放されました。) <AD>

(37a, b)には行為者が顕在化していないが、含意はされている。非顕在型の誰か不特定の行為者(i.e. 【+animate; -specific】 Agent)がいて、ドアの開閉や若者の釈放を行うのである。

行為者の脱焦点化がさらに進むと、その含意すら消失する事例が出てくる。

- (38) a. Ter üje-d ödör бүр radio-g-oor japon duu
 that+era-D/L every day radio-EP-INS Japanese song:N
 sons-o-gd-dag baj-san.
 hear-EP-PSV-HBT be-PF
 (あの頃は毎日ラジオから日本の歌が聞こえていました。)
 <山越 (2012: 253)>

- b. Xün-ij nüd-n-ij xar tojrog 24ml bögööd ene nⁱ nasan
 person-G eye-n-G black orbit:N 24mm and this:N 3POS life+
 turš-i-d barag öölčl-ö-gd-dög-güj ažee.
 during-EP-D/L almost change-EP-PSV-HBT-NEG ASR
 (人間の目の黒い部分は 24mm で、これは一生の間にほとんど変わる
 ことがないのです。) <ÖS 1999/10/21>

- c. Tegsneer ene asuudal бүрмөсөн šijdverl-e-gd-e-x
 by doing that this+ problem:N completely decide-EP-PSV-EP-NPS
 bol-no.
 become-PRS
 (そうすることで、この問題は解決するようになります。)
 <M: 322>

(38a, b, c)は行為者と関係なしに、特定の事態が生じる／生じないという出来(coming-into-being)、もしくは自発(spontaneity)の意味を帯びている。山越(2012: 252)は、受動構文において「行為者が明示されない場合、とくに知覚動詞などは『自発』の意味になることが多くある」と解説している。確かに、(38a)の sons- “to hear, listen to”に加え xar- “to see, look at”、üz- “to see, glance at”等の知覚動詞がこの文脈で使用される傾向はあるが、(38b)の過程

動詞 *öölčil*- “to change”や(38c)の認識動詞 *šijdverl*- “to decide, resolve”なども受動化することで「自発」の意味を獲得する⁹。

出来もしくは自発の意味は、事態そのものに専ら焦点の当たる非人称受動構文(*impersonal passive sentences*)とも密接に関わってくる (Mulchukov and Ogawa (2011)、Kulonen (1989)、Ramat and Sansò (2011)、Cornelis (1997))。Kulonen (1989: 258)は非人称受動構文を「事態(events)が意味上受動的となるような視点をとる構成要素を持たないような状況を表す」と述べた上で、次の3つの特徴を挙げている。

(39) 非人称受動構文の意味的特徴

- a. 不定主語(*an indefinite subject*)の行為を表す。
- b. 行為者は存在せず、完全に降格(*demoted*)している。
- c. 文中の他の構成要素は、対応する能動構文と同じ位置にとどまる。したがって、文中に目的語があれば、受動構文になっても、そのまま目的語の位置にとどまる。

モンゴル語にも非人称受動構文と思われる例が観察できる。

(40) a. Bi [Bat-ijn Dulmaa-taj xamt mašn-aar jav-a-x-ijg]

1SG:N Bat-G Dulmaa-CMT together car-INS go-EP-NPS-ACC

xar-san.

see-PF

(私は、バトがドルマーと一緒に車で出かけるのを見ました。)

b. [Bat-ijn Dolumaa-taj xamt mašn-aar jav-a-x-ijg]

Bat-G Dolumaa-CMT together car-INS go-EP-NPS-ACC

⁹ 査読者より(38)に見られる構文は、行為者が消失して内項が主格形になる逆使役(*anticausative*)ではないかとの指摘を受けた。接尾辞-*gd*-には、受動と逆使役の2つの機能があるということである。確かに、主格形主語が[-animate]で、動詞が非行為動詞(*nonactive verbs*)で、与位格形名詞句を伴わない場合、-*gd*-は逆使役の機能を発揮する傾向にあるように見える。貴重なご指摘に感謝申し上げたい。なお、受動構文と逆使役との関係については、Sasaki and Yamazaki(2006)を参照のこと。

xar-gd-san.

see-PSV-PF

(バトがドルマーと一緒に車で出かけるのを見えました。

Lit. バトがドルマーと一緒に車で出かけるのを見られました。)

<(40a)は山越(2012: 259)、(40b)は山越(2012: 287)>

(40a)は知覚構文である。対格形の非過去形動詞に導かれた節全体が主節動詞 xar-“to see”の目的語となっている。この文を受動化すると、(40b)のように、主格形の行為者は完全に姿を消すのに対し、目的語は手つかずの対格形のまま残る。(39)で挙げられた非人称受動構文の 3 つの特徴をすべて満たしていることがわかる。

4.4 bol-構文

動詞 bol-には、状態変化の結果「～になる(to become)」の意味がある。基本形は、主格形主語：主題(Theme) + 形容詞補語／ゼロ格形補語：状態変化の結果(Result of State Change) + bol-である。

(41) a. Minij bije zügeer bol-son.

1SG:G body:N well become-PF

(私の身体はよくなりました。) <M: 198>

b. Ter xün minij orčuulagč bol-loo.

that+ person:N 1SG:G translator:Ø become-RPST

(その人は私の翻訳者になりました。) <M: 197>

(41a)は補語に形容詞 zügeer “well”が、(41b)はゼロ格形名詞 orčuulagč が、各々現れている。

bol-構文が、時間、環境状況（明暗、寒暖等）、気象、季節などを表示する場合、常に無主語文の形を見せる。

(42) a. Ger-t-ee xür-e-x zam-ijn xagas

house-D/L-REF get to-EP-NPS way-G half-Ø

bol-ood-güj-g-eer бүр xaranxuj bol-o-v.

become-PCC-NEG-INS completely dark become-EP-PST

(自分の家に着く道の半分にもならないうちに、すっかり暗くなりました。) <Austin, et al. (1997: 30)>

b. Xičeel exl-e-x cag bol-loo.

lesson:N begin-EP-NPS time:∅ become-RPST

(授業の始まる時間になりました。) <L: 128>

c. Xon¹ mal xijs-sen xüčtej salxi bol-žee.

sheep:∅ cattle:∅ blow off-PF strong wind:∅ become-PPST

(羊や家畜を吹き飛ばす強い風になりました。) <AD>

(42a)の後半節では、bol-の直前の補語の位置を形容詞 xaranxuj “dark”が占めている。この節には主語がないだけでなく、人称性の気配もない。(42b)、(42c)は共にゼロ格形名詞句補語の出現する文であるが、何が「授業の始まる時間になった」のか、あるいは何が「強い風になった」のかを問う必然性が見当たらない。

上記のような文は、英語であれば(43a, b)のように虚辞的な 3 人称代名詞 it を用いるところであるが、モンゴル語では(42a, b, c)のような無主語文になるのである。

(43) a. It completely got dark.

b. It became the time when the lesson began.

bol-構文は、未完了連結接尾辞-*z/-č* と組み合わせる可能性を述べることができる。この用法での無主語文は、一見、非人称構文のように見える。

(44) a. Ene sajxnij salon-d üsč-ijg song-o-ž üs-ee

this+ beauty parlour-D/L hairdresser-ACC select-ICC hair-REF

zas-uul-ž bol-no.

repair-CST-ICC can-PRS

(この美容室では美容師を選んで散髪してもらうことができます。) <山越 (2012: 260) ; ただし、下線部は筆者による付加>

b. Japon ruu galt terg-eer jav-ž bol-o-x-güj,
Japan: towards train-INS go-ICC can-EP-NPS-NEG
usan ba nis-e-x oncoc-oor jav-dag.
water+ and fly-EP-NPS ship-INS go-HBT

(日本へ列車では行けません。船と飛行機で行くのです。)

<Skorodumova (2002: 118)>

(44a)には散髪してもらう受益者(Beneficiary)は顕在化していないが、【+animate; -specific】のお客なら誰でもという総称的な読みができる。(44b)は日本へ行く手段に専ら重きを置いているが、(44a)同様に、日本へ行く人なら誰でもという総称文と解するのが妥当であるように思われる。もっとうなら、(44a)の bol-には現在形接尾辞-na^d が付加している。また、(44b)の bol-には非過去形接尾辞に否定形接尾辞の付いた-x-güj が、文末の習慣形接尾辞-dag^d と対比の関係にある。つまり、両文とも、形式の面でも意味の面でも、第 3 節で考察した総称的無主語文に属するのであって、非人称構文には当てはまらないのである。

4.5 まとめ

非人称性を意味素性からまとめると、次のようになる。

(45) 意味素性から見た非人称構文

【-animate; -specific】のタイプ: 与位格形名詞句トピック型無主語文、語り手の視点叙述 (神の視点(the viewpoint of God)、あるいは全能者の視点(the omnipotent viewpoint))、事態目的語型受動構文、状態変化結果型 bol-構文。

モンゴル語の非人称構文は、意味素性のどちらにもマイナスを冠し、行為者や経験者が完全に払しょくされた無主語文と規定することができる。

5 結論

ある構文が人称的か非人称的かについては、行為者の影響の及ぶ度合いと関わる事が明らかになった。行為者は主格形以外の格形で顕在化する場合もあるし、顕在化はしないものの、構文の中に意味上の痕跡を残し含意される場合もある。本稿では、行為者を、有生性(animacy)と特定性(specificity)という意味素性を利用して記述した。プラスとマイナスの組み合わせから捉えた無主語文は、次の3つのタイプに分かれることがわかった。

(46) 二つの意味素性の組み合わせから見た無主語文タイプ

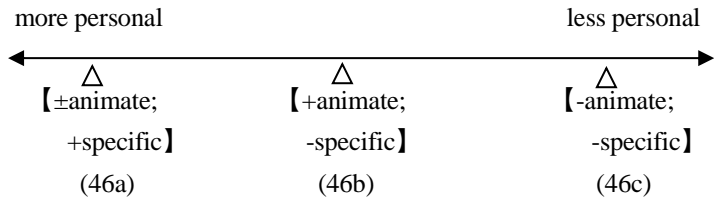
- a. 【±animate; +specific】: 要請形-aačʰ、要求形-aarajʰ、懇請形-gtun/-gtün、訓戒形-uuzaj/-üüzej、意志形-ja/-ju/-jü、願望形-sugaj/-sügej の出現する無主語文；文脈復元型の人称的 PRO_P を有する無主語文。
- b. 【+animate; -specific】: 総称的 PRO_{GER} を有する他動詞型及び複文型無主語文。
- c. 【-animate; -specific】: 与位格形名詞句トピック型無主語文；語り手視点叙述文、事態目的語型受動構文；状態変化結果型 bol-構文。

主語の顕在化しない構文でも、(46a)のように特定の人称を固有に担った接尾辞やトピックの一貫性に基づく照応性によって支えられる人称的なタイプと、(46b)のようにそうした支えを持たない代わりに動詞のタイプ (i.e. 行為動詞) と述語に現れる文法要素 (i.e. アスペクトや時制に関与しない接尾辞や語彙) により人称性に関して含みを残すタイプに分かれる。また、完全に非人称的と解釈される場合には、(46c)のように有性性にも特定性にもマイナスの値が付与される。ただし、このタイプに属するとされる受動構文や bol-型構文のすべてが非人称的というわけではなく、形式と意味の違いにより人称性を示すものが数多く併存しているのも事実である。このように、モンゴル語の非人称構文は、他動詞構文、複文、受動構文、bol-構文など個々の構文と一対一で対応するのではなく、人称性の度合

いの濃淡を示しながら、各構文を横断して分布する性格を持っているのである。

最後に、有生性と特定性を踏まえて、構文の人称性の度合いの連続的変異の尺度(cline)を記述すると、次のようになる。

(47) モンゴル語の人称性の尺度



有生性の有無に関わらず特定性があることで人称性が保証されるのに対し、特定性を欠くと人称性の度合いは落ち、有生性と特定性の両方が欠如すると非人称性の色合いは限りなく濃くなるのである。

今後検討を要すると思われる事項を、3点挙げて結びとする。

- 1) 人称性を適切に記述するのに、有生性と特定性だけでよい。
- 2) 本稿で採り上げた以外の構文に非人称性を示すものが存在するか。
- 3) モンゴル語の非人称構文と他の言語の非人称構文とを、類型論的視点から比較し、類似点や相違点、その背後で働く要因を明らかにする。

【引用文献】

略語と文献の対応は、次の通りである。

B: Baatarsukh (2009), CD: Hangin (1970), L: Luvsanzav (1976), M: Kullmann and Tsrenpil (1996), MX5: Bjambasan (1979), MYA: Arai, et al. (1990), ÖS: Ödriin Sonin (Online Newspaper), S&B: Sanders and Bat-Ireedüj (1999).

【参考文献】

Abraham, Werner (2011) ‘Verbs of motion: Impersonal passivization between unaccusativity and unergativity’. In: Malchukov and Sierwierska (eds.), 91-125.

Abraham, Werner, and Larisa Leisiö (eds.) (2006) *Passivization and typology: Form and function*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Arai, Shin-ichi, et. al. (eds.) (1990) *Mongol-Japon jarjaanij devter.* Ulaanbaatar: Ulsijn Xelvelijn Gazar.

Austin, William M., and Peter M. Onon (1977) *Mongol reader*. London/New York: Routledge.

Baatarsukh, Khatantuul (2009) *Mongolian grammar: Textbook*. USA: Munkhbayar Batmunkh.

Bjambasan, P. (ed.) (1979) *Mongol xel: 5 angi*. Ulaanbaatar: Ardijn Bolovcrolijn Jaamnij Xevlel.

Cornelis, Louise H. (1997) *Passive and perspective*. Amsterdam: Rodopi.

Givón, Talmy (ed.) (1983) *Topic continuity in discourse: A quantitative cross language study*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Hangin, John G. (1970) *A concise English-Mongolian dictionary*. Bloomington: Indiana University.

橋本邦彦 (1995) 「習慣相」『室蘭工業大学研究報告 - 文科編 - 』45 : 35-67.

- 橋本邦彦 (2003) 「モンゴル語の受動文の意味と機能」『日本モンゴル学会紀要』33 : 15-27.
- Kullmann, Rita, and D. Tsrenpil (1996) *Mongolian grammar*. Ulaanbaatar: Jensco Ltm.
- Kulonen, Ula-Maija (1989) *The passive in Ob-Ugrian*. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.
- Leisiö, Larisa (2006) 'Passive in Nganasan', In: Abraham and Leisiö (eds.), 213-230.
- Luvsandorj, Amarsanaa (ed.) (2006) *Oxford-Monsudar English-Mongolian dictionary*. Oxford: Oxford University Press. Ulaanbaatar: Monsudar Publishing.
- Luvsanzav, Čoj (ed.) (1976) *Mongol xel bičig*. Ulaanbaatar: Sajd Narijn Zövlölijn Ulsijn Deed, Tugaj Dund, Texnik Mergežlijn Bolovcrolijn Xevlel.
- Makchukov, Andrej, and Akio Ogawa (2011) 'Towards a typology of impersonal constructions: A semantic map approach', In: Malchukov and Sierwierska (eds.), 19-56.
- Malchukov, Andrej, and Anna Sierwierska (eds.) (2011) *Impersonal constructions: A cross-linguistic perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Malchukov, Andrej, and Anna Sierwierska (2011) 'Introduction', In: Malchukov and Sierwierska (eds.), 1-15.
- Ramat, Anna Giacalone, and Andrea Sansò (2011) 'From passive to impersonal: A case study from Italian and its implications', In: Malchukov and Sierwierska (eds.), 189-228.
- Salo, Merja (2011) 'Meteorological verbs in Uralic languages –are there any impersonal structures to be found', In: Malchukov and Sierwierska (eds.), 395-438.
- Sanders, Alan J. K., and Jantsangiin Bat-Ireedüi (1999) *Colloquial Mongolian*. London/New York: Routledge.
- Sansò, Andrea (2006) "'Agent defocusing" revisited: Passive and impersonal constructions in some European languages', In: Abraham and Leisiö (eds.), 232-273.

- Sasaki, Kan, and Akie Yamazaki (2006) 'Two types of ditransitive constructions in the Hokkaido dialect of Japanese,' In: Abraham and Leisiö (eds.), 352-372.
- Shibatani, Masayoshi (1985) 'Passives and related constructions: A prototype analysis', *Language* 61, 821-848.
- Skorodumova, L. G. (2002) *Učebnik Mongoliskogo Jazijka*. Moskva: Muravej.
- Vietze, von Hans-Peter (1978) *Lehrbuch der Mongolischen Sprache*. Leiptig: VEB Verlag Enzyklopädie.
- 山岸勝榮 (編) (2009) 『スーパー・アンカー英和辞典 第4版』学研
- 山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』白水社

Impersonal characteristics of subjectless sentences in Mongolian

Kunihiko HASHIMOTO

This paper treats the description and analysis of impersonal constructions in Mongolian. The aims to be achieved are the following:

- 1) To discriminate between personal constructions and impersonal constructions by analyzing various subjectless sentences, which tend to be identified as one of typical forms of impersonality from the point of view of linguistic typology.
- 2) To consider what factors make the sentences personal or impersonal in terms of both forms and meanings.
- 3) To show that, through the analysis and consideration, the distinction between personality and impersonality is not clear-cut, but vague and gradual; that they construct a scale of cline.

All subjectless sentences, including a transitive type, a complex clause type and a *bol*-type, do not present impersonality. As well as that, all passive sentences do not indicate impersonal characteristics. The results demonstrate that impersonality does not consist in a certain construction, but pervades itself across several different constructions. They also reveal that personality and impersonality form a continuous scale of cline from more personal to less personal based on the semantic features, animacy and specificity.

The Graduate School of Engineering

Muroran Institute of Technology

27-1 Mizumoto, Muroran, Hokkaido 050-8585, Japan

E-mail: 92hashimot@ gmail.com